

2025 年神戸での学術総会を振り返って

上野 修一 Shu-ichi Ueno

第 121 回日本精神神経学会学術総会会長
愛媛大学大学院医学系研究科精神神経科学
一般財団法人創精会松山記念病院（現所属）

第 121 回日本精神神経学会学術総会を 2025 年 6 月 19～21 日に神戸国際会議場，神戸国際展示場，神戸ポートピアホテルで開催致しました。簡単ですが，ご報告致します。本学会学術総会を愛媛大学精神科教室が主催させていただくのは，1994 年に柿本泰男愛媛大学神経精神医学初代教授が，松山市総合コミュニティセンターで開催して以来です。今回は神戸市での開催ですが，せっかくの機会ですので，愛媛県の学会員に以下の役割をお願いしました。副会長は，日本精神科病院協会愛媛県支部支部長，くろだ病院院長の黒田典生先生，事務局長は，愛媛大学精神神経科学准教授の伊賀淳一先生（現教授）です。

学術総会のテーマは，「精神神経科学の充実・発展のために取り組むべきこと—Enhancing and Developing Psychiatry and Neurology : Issues To Be Addressed—」としました。本学会は，1902 年に精神科医の基盤となる学会として設立され，2018 年に始まった新専門医制度の基本領域 19 学会の 1 つです。そして，日本専門医機構認定の精神科専門医を養成する重要な役割を担っています。2025 年は，昭和 100 年，第二次世界大戦後 80 年の節目となる年でした。これらの時代的背景も鑑み，本学会は，精神科医療を担う集団の拠り所として，これまで築き上げた歴史を大切にしたいうえで，客観的な精神神経科学の事実を積み上げることにより，さらに本学会の伸長をめざすべきだと思います。本学会会員である精神科医一人ひとりが真摯に精神神経科学に取り組みながら生涯を通じて形成的に成長することで，その総和が学会の実力となると考え，このテーマを

選びました。

さて，学術総会の企画にあたり，プログラムが充実してきたのは良いのですが，3 日間の開催日程にすべてを十分反映できないことが問題となりました。そのため，今回の学術総会から，構成はプログラム委員の提案による「特別講演」「教育講演」「先達に聴く」「市民公開講座」と，全会員から提案できる「シンポジウム」「ワークショップ」「一般演題」とに分けて募集し，各委員会からの提案は，原則として 1 つとし，コンパクト化を図ることとなりました。COVID-19 の拡大以降には，学術総会終了後に，発表内容をオンデマンド化して広く会員に視聴してもらえるようにしていますが，今回も単位取得認定のため期間は制限されるものの，発表内容はできるだけ多く配信することと致しました。残念ながら，経済的事情からライブ配信ができなかったことはお許しいただければと存じます。

上記の方針に則り，プログラムの構成では，われわれの所属する中国四国地区の学会員を中心に協力いただき，学術総会のテーマに沿って企画しました。若者目線からみた聴きたい内容をプログラムに取り入れ，国内外の講師を招いた「特別講演」，各領域の第一人者による「教育講演」「先達に聴く」を設定しました。

会長企画シンポジウムからいくつかご紹介しますと，まず，現在の精神医学領域では，分子生物学的手法を用いた解析が他の医学領域以上に進められてきていますが，これらの最新情報を提示していただきました。続いて，医学の進歩により人生 100 年時代を迎えようとしている今，神経

✉ E mail : shuichi.ueno@gmail.com

受 付 日 : 2025 年 12 月 26 日

受 理 日 : 2026 年 2 月 23 日

doi : 10.57369/pnj.26-100

発達症から認知症まで、精神医学的に必要な知識や抱える問題は複雑化しています。このライフイベントを考える、「ゆりかごから123歳まで」のシンポジウムを行いました。こころの問題は人生のどの時点を切り口としても重要であり、その対処法の一部を提示できたのではないかと考えています。精神科医療にとって薬物療法は、リハビリテーション療法、精神療法と3本柱の1つで、薬なしには精神科治療は考えられません。精神科領域では、他の医学領域に比較しドラッグ・ラグ（ドラッグ・ロスともいう）が大きく、海外に比較しても新薬の開発、発売が最も遅れている領域だといわれています。この問題に取り組むために、医薬品医療機器総合機構理事長の藤原康弘先生に基調講演をお願いし、中枢神経系にかかわる新薬開発について、大阪大学大学院医学系研究科神経内科学の望月秀樹先生（当時）、愛媛大学大学院医学系研究科脳神経外科学の國枝武治先生から最新の情報を教えていただきました。結果として、これらのセッションは、現地でも、オンデマンドでも、たくさんの学会員にご視聴いただきました。

その他にも精神科領域の幅を広げるプログラムを取り入れられました。日本科学未来館館長の浅川智恵子様より、「科学技術と共に実現するインクルーシブな未来社会に向けて」の題でお話いただきました。浅川様は、事故により小学生時に失明されましたが、そのハンディキャップを乗り越え、視覚障害者のための機器を開発されています。GPSで位置を解析し、目が不自由でも一人で街を歩くことができるAIスーツケースという補助具で、この学術総会時に同時期に開催されていた大阪・関西万博でも展示されたものです。障害に関係なく日常生活を送れるようになるヒントをいただいたと思います。

市民公開講座では、愛媛県出身の劇作家の鴻上尚史さんに「同調圧力とエンパシー」の題でお話いただきました。また2025年は、神戸・北淡地区を中心に発生した阪神・淡路大震災が起きて30年となる節目の年でした。学術総会が神戸市での開催でもあったため、災害時の心のケアを忘れず次世代につなげることを目的に、震災当時、精神科医として災害に立ち向かわれた神戸大学の安克昌先生をモデルとした映画『心の傷を癒すということ』を上映し、兵庫県立ひょうごこころの医療センターの田中究先生をコーディネーターに、映画監督の安達もじり様、一橋大学の宮地尚子先生を招いた鼎談を行いました。

多くの学会員の皆様からもシンポジウムやワークショップの提案をいただき、ありがとうございました。できる限

り採択させていただきましたが、残念ながら時間や会場の制限から、お断りせざるを得ないものもあり、その点は大変心苦しく思っています。全体で、講演31、シンポジウム141、ワークショップ17と、コンパクトながら充実したセッションとなりました。一般演題にも、たくさんのご応募をいただき、304演題が採択されました。加えて、精神科医を希望する研修医、学生からの発表も34と多く集まりました。学会員からのみでなく精神科医候補生から、かように多くのご応募をいただき、討議する時間を共有できたことは、本学会がさらに発展していく素地となったと、学術総会を運営した者として大変嬉しく思います。おかげで、多くの学会員の皆様に神戸の地まで足をお運びいただき、どのセッションも盛況でした（図1～4）。最終的に現地の参加者は5,147名、WEB視聴を含めたすべての登録者は9,972名でした。

また、2024年の札幌での第120回学術総会を参考に、会場周辺にキッチンカーを準備しました。幸い、天候にも恵まれ、会員の皆様が、お食事や飲み物、デザートなどを召し上がりながら、会場外でも日常の精神科臨床について三々五々に語りあい、親交を温める場が作れたことはよかったです。また、COVID-19の流行以降、当学会の各委員会の交流は、インターネット会議が中心となり、直接顔を合わせる機会が少なくなったことを残念に思っておりましたが、学会執行部の提案により、学術総会期間中に昼食を取りながらの委員会を開催する場を設けました。今回ははじめての試みのため、昼休みの時間を利用した短時間の委員会開催でした。十分な話し合いができなかったとの意見もあるため、今後の学術総会では、会期中の委員会の開催方法や時間調整など、ご検討くださいますようお願い致します。

事後のアンケートでは、回答数は500名と少ないながらも重要なご意見をいただきました。開催内容は、「おおむね満足」と8割以上の学会員から回答いただきました。愛媛県のゆるキャラ、「みきゃん」の出迎えや蛇口から出るみかんジュースなど、お国柄を感じられる展示も好評でした。オンデマンド視聴については期間や内容ともに「満足」との意見が多かったように思います。一方、現地では日程により終了時間が遅すぎる、希望するセッションが重なる、会場が満員のため視聴できなかった、などの意見がありました。終了時間や収容人員については過去のプログラムを参考にしましたが、もう少し検討が必要かもしれません。これらについては、オンデマンドでの視聴でお許しいただ



図1 懇親会の乾杯の様子



図2 開会式



図3 愛媛のゆるキャラ「みきゃん」

ければ幸いです。その他、国際委員会の皆様により、Fellowship Award Symposiumなど従来の取組に加え、さまざまな交流企画を考えていただきましたが、海外からの参加者はまだ十分ではありません。若手精神科医が自由に交流できる場もやや乏しかったように思います。これらの点は反省材料として、学術総会企画委員会で検討され、次回からの開催に活かしていただきたいと存じます。

この学術総会報告を終えるにあたり、三村将理事長（当時）をはじめ理事の皆様、学術総会企画委員会や運営委員、プログラム委員の皆様、司会、座長をお引き受けくださった皆様、そしてご参加くださった会員の皆様に、心よりお礼申し上げます。また、この開催は、日本精神神経学会事



図4 蛇口からみかんジュース

務局の皆様、運営に携わっていただいていた株式会社コングレの皆様の手助けなくてはできませんでした。改めて感謝申し上げます。最後になりますが、本学術総会を通じて精神神経科学の発展に少しでも寄与できたとすれば、著者の最大の幸せです。本学会のさらなる充実、発展を祈念致しまして、結びとさせていただきます。